

城跡! GOURMET 焼そば (川越城)

昨年の秋、姫路城周辺で「B-1グランプリ」が開催され、全国各地から“B級グルメ”の逸品(?)が集結。2日間で51万人もの来場者(主催者発表)がありました。全国ネットのニュースやバラエティ番組でも紹介され、上位入賞すれば地域への経済波及効果が期待できるイベントになっています。そのため、B-1のための“B級グルメ”を開発する町もあるようです。そんなB-1メニューの中で、外れのないのが焼そばです。B-1人気の端緒となった第1回グランプリを獲得したのが「富士宮やきそば」(静岡県)で、昨年が「蒜山やきそば」(岡山県)というところからもわかっていただけるでしょう。

本号で紹介するのは、焼きそば。それを堪能するために、川越城跡(埼玉県)まで出かけます。

川越城は、中近世において武蔵国西部の入間(いるま)郡の中核的位置を占めていました。中世には入間川左岸に河越氏が館を築いていました。その場所は、東山道武蔵道の渡河点に推定される場所に近く、かつ入間郡家跡も隣接していることから、交通および古代以来の在地支配の要衝を押さえていたこととなります(※『よみがえる河越館跡』川越市立博物館、2010)。河越氏没落後は、入間川が南西から約270°の円弧を描くその中心点に、右岸の舌状台地を利用して城が築られました。地理的には武蔵国を南と北に分ける位置にあり、武蔵府中から上野・下野方面に南北移動する場合の入間川渡河点、まさに川越でありました(『甲子夜話』巻六十一には、川越の由来が「上方から奥州へ下る者、中山道を経て熊谷駅より右に入り、松山を過ぎ、入間川を渡るなり。その川向の地なれば、かく云とぞ」と地元の人から聞いた話として記されている)。



川越周辺図(文献※より) : xが近世川越城



写真1: 汗のような涎

また、この地は比企郡の広い丘陵部と関東平野の境界にあり、武蔵西部の山地からの物資集散地でもあり、北条氏や上杉氏の角逐場となった一つの要因とみられます。江戸時代初期、川越城下の商人が江戸で仕入れた塩を武蔵北部や秩父地方へ捌いていたのも(『榎本弥三衛門覚書』平凡社、2001)、こうした前代からの流通網を押さえていたからなのでしょう。

近世になると、川越城は江戸城の北の防御を担うと同時に、前述のように江戸へ供給する物資集積地となり、有力譜代大名が配置される格式高い城地となりました。しかし、明治維新後、早くから城の建物や土地は順次払い下げられ、城跡には学校や県庁等が置かれ、土塁は畑や果樹園に、堀は水田に転用されました。

現在の川越城跡は、本丸跡に御殿建築が部分的に現存しています。その東側には三芳野(みよしの)神社が鎮座し(写真3)、かつて本丸内にあり神社の周囲を廻って天神郭を構成した土塁も一部残っています。写真3に見える参道が♪とうりゃんせ♪に唄われている「天神様の細道」のことなのでしょう、ちょっとした雰囲気があります。参道の周囲は遊具のある公園になっていて、子供たちにとっては適当な遊び場です。土塁上に繁茂した樹木が好天でも日光を遮ってくれるので、多少気温が高くても虫除けスプレーさえあれば、楽しく遊べそうです。

本題の焼きそばは、本丸跡の一角にある商店で売られています。店内にはカウンターとテーブルがあり、10人も入れない小さなお店です。メニューも焼きそばだけで、駄菓子や玩具も少し置いてあります。そして、写真1のポスター兼メニュー。どんな店なのかは察していただけるでしょう。焼きそばの味はいたってシンプルで、一般男性には分量が少ないかもしれません。一緒にラムネを注文すれば、炭酸で腹を膨らますことは可能です。関西人ならご飯も注文したくなるでしょう。西隣の八幡曲輪跡には県立川越高校がありますし、本丸東の堀跡と新曲輪跡に出来た初雁球場(川越城の別名は初雁城)では高校野球の県大会も開かれますから、これからの季節には男子高生で店内が埋め尽されること間違いありません。



川越城図(『川越城』第35回企画展パンフ、2011)

店内に充満するソースと油煙、男の汗の臭い…想像するだけで食欲が失せます。

さて、本丸跡で小腹を満たしたら、蔵造りの商家が今でも残る旧城下町を散策してみましょう。「小江戸」とも呼ばれる町並みを堪能しているうちにまたもお腹も空いてくることになります。そこで今度は川越名物のさつま芋を使った美味しいスイーツなんかはいかがでしょう。結局、ダイエットには不向きなお城です。



写真2 御殿家老詰所の人形: 左が松平家家老の小河原左宮らしい



写真3: 三芳野神社(南から)

